



④「高くてまずい」というスキー場の食堂のイメージを変えたいと、外装とメニューを一新した「星フル降るレストラン」。戸狩再生への象徴的存在。⑤食堂内で販売されるメニューには、地域の食材をふんだんに使用している。



実際、昨年からの動きには目覚ましいものがあります。名物に育てようとして、リンゴや豚肉など地域食材をメインに使った民宿用メニューを考案したり、スキー場レストランでは、大幅な改装とメニューの刷新

戸狩観

始めた戸狩。

低迷からの反発力
「10年間下がり続け、もがけばもがくほど泥沼にはまっています。あまりに低迷したから、気持ちがあつ切れたんでしようね。」

光協会の江沢一遠(かずとほ)会長は、最近の戸狩の原動力を低迷からの反発力だと言います。「動かすにじつと待つていれど、また良い時代が巡ってくる」という考えから脱皮しいわば「静」から「動」へと舵を切り

昨年からは戸狩温泉スキー場が始めたユニークな取り組みが注目を集めています。昨シーズンの来場者数は、前年対比23%増と、県内のスキー場では、飛び抜けた伸び率を記録しました。他スキー場からも熱い視線を浴びている戸狩温泉スキー場の取り組みをご紹介します。

スキー場再生に向けて挑戦し続ける 戸狩の取り組みをご紹介します

さらに今年も、吉本興業とタイアップして若手芸人によるお笑いライブを展開するなど、スキー場の常識を打ち破る斬新な企画を矢継ぎ早に打ち出しています。

意見通う風通しのよさ
この背景には、金融機関の働きかけやコンサルタントの助言も確かにあるのですが、戸狩の発想面での変貌を支えているのは、地域で自由に発言できる場が自発的に芽生えてきたことと無縁ではありません。例えば、地元若手人たちが作った「GGC(ギリギリクラブ)」は、観光協会とは一定の距離を置きながらも、自らアイデアを練って協会に持ち込むようになりました。また、民宿でも、危機感が後押しして、「自分たちで動かなければ」というように意識

がわりつつあるようです。その意識は、民宿をはじめ地元にとつての生命線であるスキー場だけではなるとしても残さねば、という強い気持ちにもつながっています。

サービスの質向上を
今後のスキー場の淘汰時代には、客人数15〜20万人程度の中規模スキー場が、その機動力を生かして生き残れる最底辺だと戸狩観光協会では見えています。協会では、これまでの民宿や食堂の保護的な立場から、お互いの競争を促す立場へと足場を移しつつあります。それは、競争を通じて、民宿や食堂全体のレベルの底上げにつなげたいとの狙いからです。

「最近の動きは、派手に見えるかもしれませんが、地道にやっていたい」と話す協会の皆さん。今年の来場者数の実績が今後のバロメーターとなるという認識を常に持ち、「印象に残り、驚かれる」スキー場を目指し、日々さまざまなアイデアを絞っています。



△戸狩観光協会の皆さん。「このままでは座して死を待つ状態。危機感が原動力」と話す江沢会長(右端)

児童・生徒の安全な登下校を。学校・親・地域がなすべきこと。

最近、登下校時の児童・生徒を狙った凶悪犯罪が新聞・テレビ等で報じられることが多くなりました。地域のそれぞれの立場で、どのように子どもを守りたいのか、教育現場では、どのような対応が考えられているのか、お伝えします。



め、試行錯誤を続けています。いまだ「試行錯誤」であるのは、教育現場自体が、急激な環境の悪化に戸惑い、対応に苦慮している状態だからです。

「人を信頼することを教えるのが、教育の原点であるはずなのに、人を疑うことを教えないければならない。それがやりきれない」と話すのは、飯山市校長会長で、秋津小学校校長の山田悦祐(えつゆう)さん。この言葉に教育現場の苦悩が読み取れます。ただ、「子どもの安全確保」は何よりも優先して守るべき

課題。そうしたやりきれなさを脇に置いて、冒頭に記したような考えうる安全対策を警察や行政と連携しながら講じているのが現状なのです。

山田校長は、「地域の協力なしに、安全確保は難しい」と言います。例えば、「地元老人クラブ」に対しては、児童の下校時に散歩したり、畑仕事をしてくれるようお願いしました。登下校時に、できるだけ地域の人の目を児童にか

けてほしい、との願いからです。

親の立場では…
また、親の立場から話してくれたのは、飯山市PTA連合会長の西沢良幸(りやうきつ)さん。「これほど児童を標的とした事件が続くと、この田舎でも何があつてもおかしくない、と心配になります。子どもには、外で元氣よく遊んでほしいとは思いますが、でも、過保護にするのではなく、子どもが自分で身を守る知恵も教えたいと思います。それに、地域全体が子どもを見守ってほしいというのも親としての願いです。」

第10回いいやま景観賞表彰式

第10回いいやま景観賞表彰式が「新幹線まちづくりシンポジウム」とあわせて、11月27日に市公民館で開催されました。

今年は、5件の候補の中から選考委員会による現地調査のうえ、緑化・個人の部からロッジぶなフォレストさん(斑尾高原・下写真)が選ばれました。

市民と行政による景観に対する取り組みは、全国からも

注目を浴びており、今年度は全国花のまちづくりコンクールにおいて、花のまちづくり優秀賞企業部門で(株)丸栄産業さんが推進協議会長賞を受賞されました。



△「地域の皆さんの見守りをお願いしたい」と話す秋津小学校の山田校長。

全国的には、児童の登下校はすべてバスによる送迎に切り替える動きが一部で見られるなど、犯罪抑止には効果的だと思われる手法も登場しています。しかし、子どもはいろいろなものに興味を持って、あちこち道草して成長していくものだ、とお考えの市民の皆さんも多いのではないのでしょうか。

安全確保と子どもの成長という、教育に